

## マダムの肖像

渡辺鴨禾

美佐子は三度目の結婚をし、生活にも慣れ始めた頃、無性に絵が描きたくなくなった。ブティックで出会った婦人にインスピレーションが湧き、さっそく画用紙に描き、色を塗って完成させた。どうもこの絵を見てみると、見る側の良心が呼び覚まされるような気がする。

絵を見ていると、絵の中の婦人が、

「生活を楽しみなさいよ」

と話しかけてきた。これは、私の心の奥にある願望が、そう聞こえさせるのかも知れないと、美佐子はあわてて絵を裏返し、テーブルに置いた。

美佐子が風呂に入っているときに、夫の明が帰宅した。明は不動産屋の社長で、社員は女性ばかりである。帰宅時間も一定ではない。

明はテーブルに画用紙があることに気づき、ひっくり返し、そこに描かれた女性をながめた。すると、

「浮気もほどほどにしなさいよ」

そう聞こえた。なんでこんな絵を描くんだ。絵から話しかけられた不気味さと、自身の良心の呵責の心のせいで、そのように聞こえるのかもしれないと思った。明は絵を元のように裏返しにした。

美佐子の友人の邦子が新居を訪れた。邦子はブティックを経営し、美佐子も常連客の一人だ。最近、売上が低迷し、邦子は店員たちにつらくあたりちらしたり、接客態度がなっていないとクビにしたりした。店員たちはこの頃、誰も笑わない。注意しただけなのに、すぐやめる若い娘にも腹が立った。

友人の美佐子も腹立たしい友人の一人だった。なんで離婚するごとに資産が増え、前夫よりも肩書きのある男性と結婚できるのかが不思議だった。大して美人でもなく、商才があるわけでもないのに、なんで三度も結婚できるのか。私は未婚だというのに。

邦子は心の中にあるモヤモヤを吐き出すように言った。

「あなたって、離婚するたび資産を増やし、ご主人も、そのつど肩書きの立派な方で、すごいね」

「浮気されては離婚するの繰り返しで、資産が増えるたびに、その資産に見合った人を紹介されて、私も落ち着きたいわ」

美佐子はそう言うと、お茶の用意をするため、キッチンのほうへ行った。

邦子はテーブルにある画用紙を見てびっくりした。絵の中のマダムが話しかけてきた。「あなた、随分、若い娘を泣かせてきたじゃないの、償いなさいよ！」

大あわてで画用紙を元に戻した。絵から声がするなんて何！ この絵気持ち悪！ 邦子はそう思い、部屋の調度品をながめた。全体的に淡い色で落ち着くが、あの絵だけがこの部屋のムードにそぐわないと思った。

美佐子がお茶を持って戻ってきた。

「どうしたの？ 顔色が悪いけど、具合いでも悪いの？」

「さっき、あの画用紙のマダムを見たら、声があるのでびっくりしちゃって」

「あなたにも聞こえるの？ 私だけかと思ったんだけど」

いったいどういうことなんだろう。このマダムは、見る人ごとに何か話しますようだ。気味悪がられても仕方がない。

美佐子がマダムを見つめている。

「家事をしつかりなさい」

と、今度は聞こえてきて、美佐子は慌てて画用紙を裏返した。

美佐子は、表面が傷だらけで、銅がむき出しになっている古い銅製のフライパンを金たわしでゴシゴシと洗い、焼きそばを作り、焼きそばソースで味をととのえて食卓に並べた。

このソースが銅の中毒をひきおすことも知らず、明は、うまそうな匂いだ、と言つて先に食べ始めた。明は三十分ほどしてトイレに行った。吐き気におそわれ、救急車を呼ぶ事態となった。

ご近所の奥さんたちが、遠巻きに見ていた。

「ご主人よ、運ばれたのは」

「再婚されたばかりだというのにねエ、ご主人も六十歳を過ぎているんだもの、私たちも気をつけなきゃね」

そう、話し合っていた。

病院で診察した結果、ドクターは銅によるアレルギー症状だと告げた。

明は夢を見た。大勢の女たちが、明の胸や足を刃物で突き刺し、そのつど、痛みが走る。見覚えのある女たちだった。痛みと恐怖で起きると、身体が汗ばんで気持ち悪い。シャワーで身体を洗う気力もない。美佐子は、ぐっすり眠っている。慌ただしい一日だったと、明は下着を全部着替え、脱いだ下着はその辺りに散らかしたまま、再び眠りについた。部屋のカビが、呼吸困難を起こす一因になるとも知らずに。

「ハックション！」

くしゃみと鼻水がしきりに出始めていた。明に喘息の初期症状があらわれた。

暑さで突然起きた美佐子がクーラーをつけると、カビくさい匂いが部屋中に充満し、冷気がこちよい。美佐子は再び眠りについた。